

第 94 号
平成 28 年
10 月

HP に創刊号から
連載中

もう一つの道

情報は、うのみにせず、注意
深く徐々に試してください。

山田整骨院
熊本市中央区出水 4-25-1
096-364-7611

<http://yamadasu.com/>

熊本交通事故, 山田整骨院

<http://www//jiko-kumamoto.net/>

西先生を範として

谷 喜一 月刊西医学 昭和 35 年 11 月

生活美学

昭和十七年、雑誌編集係として西会本部に入ったが、その翌年から徴用されて村山の某工場へ桜台高女生を引率して通うことになった。その関係で、終戦後間もなく西先生を村山の工場にお招きして講演会を開き、その夜、工場の寮に一泊されて、翌朝、帰京されたことがあった。その時、西先生は『谷君、西学も美学も同じだよ。美の哲学も西哲学も極致は一点になる』とおっしゃった。私は二十数年間、美の研究と教育に専念してきたが、私の体貌を鋭く観察せられて、突然、口にされたこの言葉は、私の心底に徹して有難く感銘されたのであった。私は、生涯を通じて、この美を擲もうとする情的生活を主とする生活を理想として生きて行きたいと考えた。科学者は知を主とする真を擲み、道德家は意に重きを置いて善を擲む。玉川学園の小原先生は宗教的に知情意を一本にして聖を提唱し、世界的に名をなしたが、西先生はこの知情意、真美善を纏て正三角四面体すなわちテトラヘドロンを西式のマークとせられたのである。

美の意義を一般人は簡単にただキレイなもの、と位に解してるが、世界の主な哲学者の説を挙げると、ギリシャでは『美とは快感を惹起すべき外界の事象』、その他『美は善なり』とか、『美は調和なり』と説いているが、『真正美は善であり、これを生活に取り入れた時、その精神作用により、体内のホルモン及び淋巴液に影響することが大で、それが健康を支配するから、常に生の総てを美化する必要がある』云々と、西先生は夙に発表されているのだ。

私は西先生のお言葉により、これを生活上に、次のように応用すべきであると考えている。

精神生活——常に心の持ち方を明朗にする。

衣の生活——虚飾にこらず、自分の特徴を生かし、肌色、肉つき、身長等長所を伸ばし、短所を隠す。

住の生活——周囲の自然に調和するように色彩、形等を工夫するようトルストイはロシアの田舎のイルクックの林の中で自然木を柱として風雨を防ぐだけで生活していたとのことである。

食生活——美味だけを考えないで、目、鼻、口、総てから快感を起こすようにする。和食の料理の特徴は目にあり、食器や、刺身や、野菜、卵等をうまく取合せ、目に一番よく感じよくする。洋食は鼻で、香りに重きを置き、香料を各種使用する。支那料理は口、即ち味に重きを置いて、煮汁は臓物、骨等にいろいろな種類を混ぜ、長く使う汁は三百年と自慢している。

円満な御人格

西先生が明治大学教授時代に同大学の総長が長い間、病気で寝ておられたので、御見舞いに行かれたことがあった。総長は市ヶ谷の自邸の二階で寝ておられ、熱が下がらないで困ると申された。すると、西先生は、熱がある時は、決して無理に起きてはいけない、便器で取ってもらいなさいと申された。しかし総長は、女中が可哀想ですと答えられたが、西先生はこの総長の女中への暖い思いやりに深く心を打たれた御様子であった。帰りに市ヶ谷の駅で電車を待つ間に、私に、『西会に就職するのは、人格向上のためだよ』と申された。人格ということについて、エドワード・グローバースという人が次のように述べている。それは

- 1、 症状のないこと。
- 2、 精神的葛藤に煩わされないこと。
- 3、 満足感を持って仕事に従事すること。
- 4、 自分自身より他人を愛すること。

これに対して西先生は情緒的特質と行動の面から吟味して、

- 1、 精神葛藤が最小である。特別の煩悶も遅延も伴わない。決断力を持っている。
- 2、 仕事に満足感を伴っている。仕事を楽しむ。疲労が目立たぬ。敢えて変化を望まぬ。最好適能率を発揮する。
- 3、 近きより遠きに及ばず愛情。社会関係、夫婦関係、親子関係に喜びを得る。他人の情緒摘要求や立場を理解して適応する。

西先生に初めて対面された方は、どなたでも暖い感じに包まれて頭が下がると云われる。新興宗教の教祖様か、いかめしい学者肌を想像していた人々は、先生の少しも高ぶらず、飾ることのない態度に敬服してしまうのである。無駄話をせられず、その人の程度に応じて西式を平易にお話しされ、参考図書の説明等をわかり易くされる。この高遠潔白な御人格は他に無いと云ってよいだろう。

西先生はどんな人に対しても不快な表情をされたり、争われることもなく、子供を怒られたこともなく、犬や猫が床の間の書籍のかげや縁の下で子供を生んでも可愛がられた。乗り物の中で足を踏まれても相済みませんと詫びられて、怒ることもなかった。虫も殺さず、菌と共に生きるというお考えであることは既に古い方は十分ご存知と思う。一周忌をお迎えするに当たって改めて先生の御人格を偲び、生涯を御報恩に捧げる決意をかためる次第である。

あ と が き

この投稿は、月刊西医学、昭和 35 年 11 月発行、西勝造先生追悼号の、追悼文集の一編です。私、山田が本文の美学に共感して、もう一つの道に掲載しました。美に憧れるも美が理解出来ずにいた所、本文で美の一端に触れることができました。今後は美的な生活を心掛けたいと思います。西勝造先生は前年に 75 歳で他界されました。健康法の指導者であり 120 歳寿命説を唱えられていましたので、西会会員にとっては青天の霹靂で、信じられない思いをしたことと思います。田中宋太郎先生の追悼文「偉大な死―御他界を偲びて」に西先生の御最期やそこに至る状況が詳しく記されていますので、全文をコピーして facebook ページ「健康の宮 山田整骨院」に載せたいと思います。ぜひご高覧ください。今回初めて 6 編の追悼文を読み、西勝造先生がいかにか多くの方々に慕われておられていたか改めて知ることが出来ました。